

2021 年度 傾斜的研究費（全学分）若手研究者独立基盤形成支援枠 研究報告書

【研究費区分】：若手研究者独立基盤形成支援枠

【所属】：人文社会学部 人文学科

【氏名】：飯田 真紀

【氏名フリガナ】：イイダ マキ

【職】：教授

【研究課題名】：広東語、台湾語、北京語の極性疑問文の類型論的考察～正反疑問文の機能に着目して

【研究実績の概要】

本研究は、広東語、台湾語(閩南語)、北京語の3言語の極性(yes-no)疑問文の意味・語用論的特徴を正反疑問文との相違に留意しつつ分析することで、疑問文という人類言語が普遍的に持つ文法範疇への理解の深化を目指す。本年度は、台湾語の疑問副詞“敢”を用いた極性疑問文、広東語の(非中立)極性疑問文である文末助詞 me1 の疑問文を考察した。また、広東語の自問・独話的な準疑問文の文法化及びそこからの談話標識の形成を論じた。

【本支援を用いた研究基盤整備の達成状況について】

- ・母語話者による協力を得て、広東語及び台湾語のコーパスの拡充を行った。
- ・漢語方言学の基礎的文献や本課題に関連した文献資料(和文・中文・英文)を収集、整備した。
- ・Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics(オンライン)の買い切り版を購入し、学内でアクセス可能とした。
- ・対面とオンラインのハイブリッドでワークショップや研究会を開催するための遠隔会議システム、スピーカー等の設備を整えた。
- ・研究成果の一部は専門業者による論文校閲を経て海外の学術誌に投稿し、掲載が決定した。

【本支援を用いた具体的な研究グループの形成について】

国内外の研究者を招き、今後の研究上の継続的な連携を視野に、オンラインにてワークショップを1回、研究会を1回開催した。ワークショップ「台湾の漢語系諸語の文法を考える」(2021年12月26日)では台湾語、客家語といった台湾で話される漢語系言語の文法現象について学術討議を行った。研究会「東アジア諸語の文法と言語使用を考える」(2022年03月26日)では広東語、北京語、日本語、韓国語といった諸言語の言語使用について考察を行った。